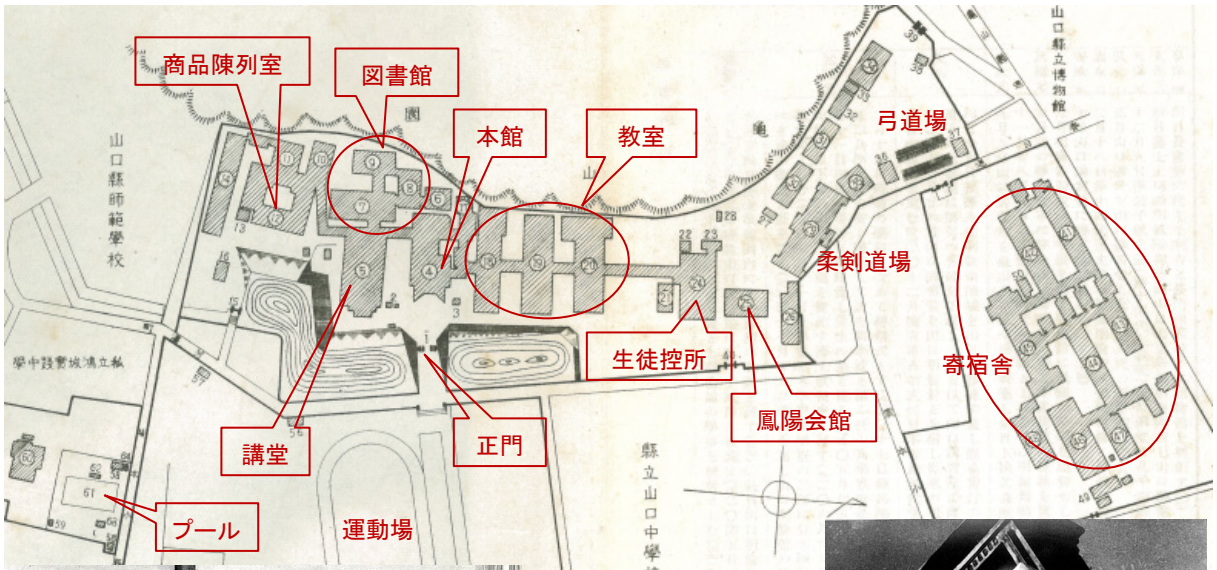
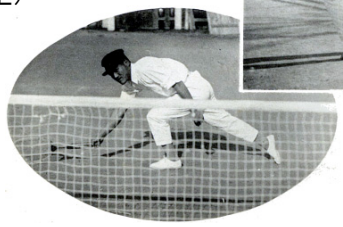
学生生活

昭和14年頃の山口高商平面図。亀山の麓に建つ田舎町の学校ではあったが、学生達は高商生としての誇りを胸に、それぞれの青春を謳歌していた。



ストーブ会議（教室）

授業の合間にコーヒーを（不二屋にて）



庭球部

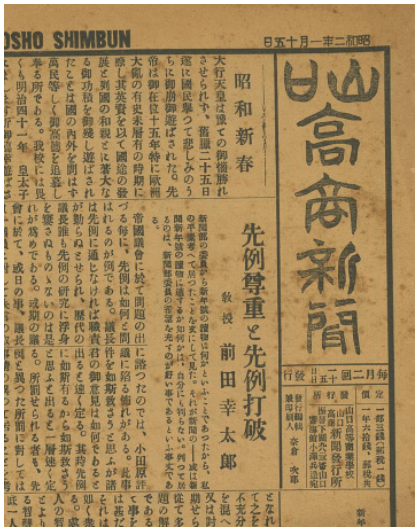
弁論大会（講堂）

自動車練習

学友会の発展

明治後期、山口高商への移行期に学友会を構成した部は、邦語講談会、英独講談会、剣術会、柔術会、ベースボール会、ローンテニス会の6部だった。

大正期には、大学昇格運動に触発されて生徒間に自発的研究心が高揚する中で「商学研究会」が結成され、「商学研究会雑誌」が発行された。また、生徒の意見発表機関として「山口高商新聞」も発行された。運動部では、長崎・大分・山口の「三高商戦」が大正13（1924）年に始まっている。


OSHO SHIMBUN

昭和二年一月十五日

山口高商新聞

昭和新春

先例尊重と先例打破

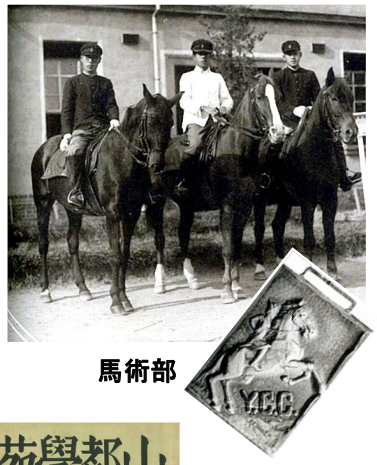
教授　前田幸太郎

山口高商新聞

その後、学友会は順調に発展を遂げ、昭和期に入ると部は急速に増えて学友会に所属する部は23部（文化部6、運動部17）にも上った。また、それ以外にも多くの団体が結成され多種多彩な活動を展開した。

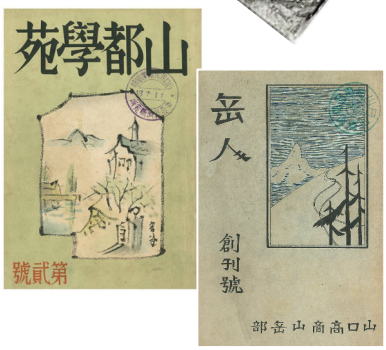
三高商戦

排球部


馬術部

陸上競技部

野球部



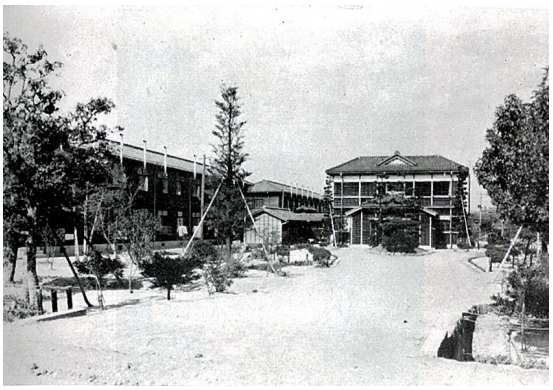
籠球部

広告研究会

鳳陽寮

寄宿舎も旧旧山高から山口高商へ引き継がれ生徒訓育の場として重視された。大正１１（1922）年に寮生の応募により「鳳陽寮」と名づけられ、寮歌「花なき山」は寄宿舎茶話会歌から「鳳陽寮歌」と呼ばれるようになった。

寮舎は著しく老朽化していたため、昭和４（1929）年に１８０名収容できる５棟の寮舎と事務室、応接室、閲覧室及び集会場からなる建物を新築、翌年にはテニスコート等の運動施設も充実した。

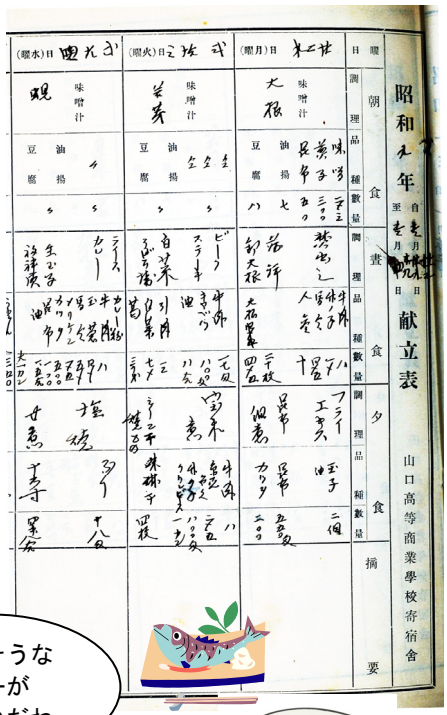


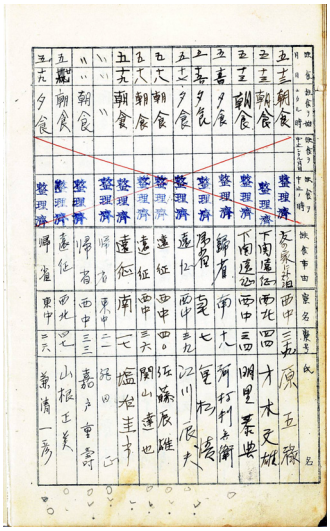
鳳陽寮（昭和4年3月新築）

南　寮

（右）**寮生の居室**
一部屋に2人～4人が入居していた
（右下）東中寮などはベッドが使用され、当時では画期的だった
（下）**浴場**

自炊制度は種々の困難に遭遇し、一時請負制度に変えられたが、昭和9年に復活した。また、明治42年から請負制による売店を廃止し、寮生全員からなる組合員の出資をもととする消費組合を設立し、自治制度の充実を図っている。





（上）**食堂**
（左）**欠食簿**
遠征などで食事が不要な時に記載していた

卒業生の就職先

右表は、昭和16（1941）年6月末における卒業生の就職状況である。

商業金融関係への就職率が高いのは当然として、鉱工業については、その企業の経理部門或いは企業会計部門に採用されたものと考えられる。当時の鳳陽会会員名簿によると就職先は三井、三菱、住友など財閥系の企業を始め、旧旧山高卒業生・鮎川義介率いる日産コンツェルン系列会社などの大企業が名を連ねている。また、南満州鉄道・朝鮮銀行・東洋拓殖などに採用され、朝鮮・中国などいわゆる外地へ赴任した者も多かった。上級学校への進学先は、九州帝国大学、東京商科大学、神戸商科大学などとなっている。

山口高商では、明治41（1908）年の第1回卒業式挙行にあたって同窓会を組織し、昭和2年に「鳳陽会」と改称、昭和5年には社団法人となった。卒業生の繋がりは非常に強く、同期生或いは先輩・後輩のネットワークが、就職を有利なものにしただけでなく、戦前期における日本企業の発展に影響を及ぼしていた。

なお、鳳陽会は山口大学発足後も経済学部同窓会として引き継がれ、今日まで伝統を連綿と伝えている。

種別	人数
商業	576
金融	504
交通	228
保険	101
工業	766
鉱業	154
電気	108
自営	371
官吏・公吏	326
弁護士・計理士	18
教員	288
学生	88
兵役	602
その他	289
無職	174
不詳	244
合計	4,837

卒業生就職状況
（『山口高等商業学校一覧』より）

鳳陽館
（亀山の本校跡地の一角に建っている鳳陽会本部事務所）

山口経専への改称

昭和18年、大学、高等、専門、中学校令が全面的に改正され、山口高等商業学校規程、規則もこれに準じ、教授要領、修練要領が訓令されて学校の独立性が失われてしまった。

第一学年は全寮制となり、文武一体の生活指導が敷かれた。昭和19年4月から全国の高等商業学校、商科大学から「商業」の呼称が消されることとなり、山口高等商業学校は山口経済専門学校へと改称した。

門標が
山口経済専門学校に